

News Letter

Number 24

日本獣医解剖学会報

September 1st, 2004

【日本獣医解剖学会の責任】

山田純三(帯広畜産大学獣医学科基礎獣医学講座解剖教室)

5年前に、獣医解剖学会を日本学術会議の公認学術団体と認定させるには学会誌の発刊が必要条件の一つですので、会長の命を受けて、皆さんの意見をアンケート調査いたしました。その結果は、賛成37(68.6%)、条件付賛成4(7.4%)、反対13(24%)でした。私はこの結果から、学会誌の発刊は時期尚早との判断を下し、会長に報告し、理事会、総会に報告しました(アンケート結果の詳細はNews Letter No. 14, 1999年10月を参照ください)。賛成が3分の2を超えておりましたが、時期尚早との判断は、学会活動に積極的に参画され、また、研究活動も活発な先生方の反対が多かったことによるものでした。発刊の理由は、1)「学会誌を発刊し、公認学会にしよう」、2)「アジアの獣医(動物)解剖(形態)学の専門誌を育てよう」というものでしたが、反対理由の主なもの、1)「WAVA(World Association of Veterinary Anatomists)の機関誌であるAnatomia Histologia Embryologiaがあるので、これを活用すればよい」、2)「評価されるジャーナルにするための良い論文を集めることが困難である(良い論文は評価の高いジャーナルに出すことになるので)」というもので、本学会が経費と労力を出して発刊する必要性への説得力が弱いというものでした。学会誌の発刊は夢であり、希望であるわけで、夢と希望とで現実を折伏することは非常に困難です。しかし、私たちは夢と希望を持ってない人生や活動には、やはりなにか空しさを感じるのではないのでしょうか。同じ論法で考えますと、JVMS(獣医学雑誌)に論文を出すより、世界の関連専門雑誌に出した方が良く、獣医解剖学会(獣医学会)に演題を出すより、解剖学会や関連医学学会に演題を出した方が良く、更に国内学会より国際学会に出したほうが良く、ということになり、突き詰めれば、獣医解剖学会は不要ではないか、という議論さえ起こりうることになります。我々が生活と研究拠点を置く獣医学や畜産学を基盤とした獣医解剖学会を小さくてもしっかりした学会にしなければ、自分たちのアイデンティティーを失うことになるのではないのでしょうか。

これまで本学会は内部の充実を活動目標に定め、活動してまいりました。獣医解剖学教育充実を考え、米国、豪州、アジア諸国から講師を迎え一連のシンポジウムを実施しました。「獣医組織学」の発刊・改訂、「獣医解剖・組織・発生学用語」の発刊、「犬の解剖、カラーリングアトラス」の翻訳・発刊および「牛の解剖アトラス」の翻訳・発刊(年内発刊予定)を獣医解剖学会として取り組んで参りました。その成果が、獣医解剖学教育への貢献とこれらの印税による獣医解剖学会活動の経済基盤の確立でした。

明治の獣医学教育は欧米の支援により開始・確立されましたし、戦後の獣医学教育も欧米の支援により再興されました。我々はこのような欧米の支援を忘れることはできません。私も田舎の新設大学の図書館にもロックフェラー財団寄贈と捺印されたSisson, Romeis, Pattenなどの古い専門書が結構あります。何で今時こんなことを言うのかとお感じでしょうが、役員会では9月の理事会と総会にAsian AVA(Association of Veterinary Anatomists)の設立を提案するからです。皆さんの講座や研究室などの経済環境が近年とみに厳しくなっていることは重々承知しておりますが、皆さんの講座などに発展途上国から留学され、学位を取り帰国し、母国で獣医(畜産)解剖学分野を研究・教育している多くの方がおられると思います。このような方々の一部でも我々が支援でき、蒔かれた種を、大きく育むことが出来れば、非常に有意義なことだと思います。私たちが自分たちだけのことを考えず、自分たちが育てた教え子やその教え子などの面倒も見てやることも私たちの責任の範疇と考えても良いのではないのでしょうか。欧米から受けた恩をアジアに返しませう。そこで、役員会では下記のような**国際的な学会活性化プロジェクト**を提案いたします。その骨子は以下のごとくです。

Asian AVA(アジア獣医解剖学会; 仮称)を設立し、WAVA Asian Region Conference(世界獣医解剖学会アジア大会)を開催する。

目的: わが国およびアジア諸国の獣医解剖学の活性化と交流および発展を目的とする。1) 国際学会と位置付け、参加者の評価に繋げたい。2) 獣医解剖学教育の改善充実および将来の統一カリキュラムおよびシラバスなどを検討する。3) 構成国間の情報交換と共同研究の推進など。

内容: 学会形式で行うが、ポスター発表とテーマを決めてのシンポジウムの2本立てで行う。ポスターとするのは語学の障壁を少なくするためとshort paper形式の要旨集(Proceedings)出版のためである。2頁のshort paper形式の要旨(ポスターを作れば、これは比較的容易に出来る)を出してもらい、これらをまとめたProceedingsを必ず出す。これは参加者へは印刷物で配布するが、他は電子出版とし、経費を節約する。

資金計画: 開催国および会員が出来るだけ自前で調達する。但し、日本獣医解剖学会(JAVA)が当面1年当り30万円を上限として支援する。出来たら韓国や台湾からも応分の支援を願いたい。企業などから賛助金を募り、出来るだけ集める。

今後の行動計画: 1) 今年の秋の理事会と総会とでこの基本方針を合意する。2) 本学会として年間30万円をこのプロジェクト実現のために、今年から積み立てることを承認する。(これは印税収入の一部を当てることで対応できる。) 3) 名称はAsian AVAではあるが、当面は範囲を東南アジアに絞り、韓国や台湾の獣医解剖学関係者にこのプロジェクトへの賛同を募り、もし賛同を得られれば本学会内に実行委員会を組織し、Asian AVAの設立総会の開催へ向けて行動を開始する。この実行委員会はWAVA Asian Region Conferenceの実行委員会へと継続される。4) 設立総会開催のための不足分は本学会の積立金から60万円を限度として支出することを認める。この設立総会で何年毎に開催するか、開催国をどうするか、など会則を含め、詳細を決定する。

目標: 再来年(2006年)春あたりに、Asian AVAおよびWAVA Asian Region Conferenceの設立総会開催を目処とし、設立構想を練り、意見交換し、設立の合意を得る。そしてConferenceの開催要領の基本合意(何年毎の開催とするか、開催地をどうするかなど)をうる。出来れば2007年か、遅くても2008年にはThe First WAVA Asian Region Conferenceを開催したい。

補足説明: 東南アジア獣医解剖学会にすると各国のボスが仕切ることになり、若い研究者の出席が難しくなり、実効のある会議(学会)が出来ないので、WAVA Asian Region Conferenceとして、この地区の会長である林先生、すなわちその母体のJAVAが仕切ることで行いたい。当面はアジア全体ではなく東南アジア中心で行う。WAVAの東南アジアの会員で開催することにすれば、国の枠組から外れるので、中国と台湾の問題を避けることが出来ると思える。

勿論のことですが、これまでの色々な施策(シンポジウムやサテライトシンポジウムの講師料の支援、奨励賞の授与、学部生対象の奨励賞の授与、発表される学生会員への学会参加費の支援、懇親会補助など)を講じて来ましたが、更なる**国内向けの学会活性化プロジェクト**として、国際学会への参加旅費の支援なども考えておりますが、これは皆さんからの要望をお聞きして決めたいと思っておりますので、ような支援策を考えて欲しいと、具体的なご提案をお願いします。

役員や理事会まかせではダメです、役員を突き上げる皆さんのエネルギーが必要です。

9月11日の総会での活発な意見交換を期待します。

(平成16年8月15日; 終戦記念日に記す)

寄稿[ミシガン州立大学での研究生活]

恒川直樹(tsune@msu.edu)

ミシガン州は、アメリカ五大湖のほとりに位置し、代表的な産業はデトロイトを中心とした自動車産業で、この他農産業も大変盛んです。ミシガン州立大学は、州都に隣接したイーストランシングを拠点としており、1855年に設立された全米初の農業大学です。現在では学生総数約4万5千人をかぞえる総合大学で、キャンパスの敷地面積は東京ドーム450個分に相当し、これらはともに全米屈指の規模を誇ります。また、日本の大学では想像もつかないような施設、例えば7万人収容のフットボールスタジアム、複合運動施設、ゴルフコース、ホテル、警察、発電所、信用金庫、劇場、日刊紙、そして大学独自の放送局まで存在します。私が所属している研究室は、Department of Animal ScienceのCellular Reprogramming Laboratoryです。研究室はAnthony Hallという名の古い建物に存在し、かつて、The Avian Anatomy Integumentの著者、Alfred M. Lucas先生の研究室があった建物でもあることを、留学直前に恩師から伺いました。上司は、Jose Cibelli博士で、昨年1月に着任された若手教授です。体細胞核移植クローン技術を利用した基礎研究を専門とし、応用研究も積極的に手がけてこられた方です。数年前にはACT社の設立に加わり、クローン研究のメッカを築き上げた実績を持たれます。研究室のメンバーは現在14名で、5カ国からなる多国籍集団です。このうち、ポスドクは6名、学生は5名で、その殆どが再生医療への応用に向けた基礎研究であり、様々な動物のES細胞を扱っています。それ故、定期的に行われるラボミーティングやセミナーでは、幅広い研究内容が紹介され、ついつい狭くなりがちな視野を是正するのに都合が良いです。残念ながら、設立1年未満の研究室であるため、研究環境が整っているとは言えません。一方、大学の研究支援基盤は、誠に充実しています。例えば、組織学の研究室は120年もの歴史があり、長年にわたって技術支援を行っているプロ集団です。我々も利用することができるため、高額な組織研究ツールを研究室単位で購入する必要がありません。また、分子生物学的手法に欠かせないPCRプライマーの合成や、DNAやアミノ酸シーケンス等を請け負ってくれる研究室があり、迅速なサービスを低額で受けることができます。さらに購買部が充実していることから、例えば汎用研究器具や試薬、酵素などは学内で購入することができます。そして特筆すべき事として、図書館が充実していることです。閉館するのは1年の中でも僅か数日のみで、平日は24時間利用できます。契約雑誌が充実しており、その殆どがオンラインで閲覧できるのも特徴です。これらは、不慣れな土地で研究する私を、強気に支援してくれます。出張などの際、是非お立ち寄りください。

第138回 日本獣医学会

(2004年9月9日~12日)

会場：北海道大学

札幌市の北海道大学高等教育機能開発総合センター・学術交流会館において3日間開催されます。獣医解剖学関連の講演は一般講演64題となっています。会員の皆様のご参加を心からお待ちしております。

A.日本獣医解剖学会

一般講演

9月10日(金)第2会場(9:00-18:00)

柴田秀史 9:00-9:36

A-1 ヲウシに認められた部分肺静脈結合異常の1例。村上隆之、津田茂浩(宮崎大)

A-2 Göttingenミニブタにおける冠状動脈の形態観察。荒川仁、堤秀樹、五十嵐真一、小田康弘、伊藤恒夫、谷川学、那須哲夫、森本正敏、萬場光一(株式会社中外医学研究所)

A-3 ラット胎子動脈管のインドメタシンに対する感受性。有嶋貴義、白井明志、山本雅子、赤堀文昭、有嶋和義(麻布大)

植田弘美 9:37-10:12

A-4 クロミンクジラBalaenoptera bonaerensisの前腕骨の骨膜におけるPAS陽性顆粒に関する研究。伊豆弥生、添田聡、石川創、神谷新司、斉藤徹、谷口和之(日獣大)

A-5 ミニブタ膝滑膜におけるコロイド金レクチンの結合性。岡野公禎、月瀬東(日大)

A-6 豚腫瘍細胞株の細胞遺伝学的研究。久保田朋子、中村成幸、白井淳資、柴田秀史、神田尚俊(農工大)

小川健司 10:13-10:48

A-7 ヒト造血因子の遺伝子導入動物におけるヒト造血幹細胞の増殖及び維持の試み。杉浦喜久弥、竹谷茂、吉村智雄、西野友善、西野直樹、藤沢順一、比舎弘子、Wijewardana Viskam、池原進、稲葉俊夫(大阪府大)

A-8 イヌ骨髄中造血幹細胞の純化方法の検討および特性の解析。茂山尚祐、杉浦喜久弥、西田英高、井上ひとみ、江口雄作、尾市朋子、杉山雄輝、鳩谷晋吾、Wijewardana Viskam、熊谷大二郎、池原進、稲葉俊夫(大阪府大)

A-9 造血幹細胞の分化および増殖に関するストローマ細胞におけるMHCシグナル伝達の検討。西田英高、杉浦喜久弥、竹谷茂、松山聡、鳩谷晋吾、熊谷大二郎、比舎弘子、池原進、稲葉俊夫(大阪府大)

星信彦 10:49-11:24

A-10 マウス周生期の造血微小環境におけるVCAM-1及びFibronectinの発現。多田達哉、Widayati Diah Tri、福田勝洋(名古屋大学)

A-11 マウスCD4+T細胞におけるActivinとTGF- β の発現と機能。小川健司、舟場正幸、辻本雅文(独立行政法人理化学研究所)

A-12 マウス肝臓、腎臓の生後血管新生におけるSox17およびSox18の役割。松井利康、金井克晃、金井正美、野馬隆志、石川万幾、城所知秀、川上速人、林良博、九郎丸正道(東大)

今野明弘 11:25-11:48

A-13 キトサンオリゴ糖のラットにおける免疫賦活作用の検討。権田辰夫、安食隆、河本舞、秦淳也、吉川貞樹、守谷みどり(島根大学)

A-14 ウシ末梢血WCI+ T細胞のサイトカイン発現。田中沙智、宮澤光太郎、永井康裕、渡邊康一、大和田修一、麻生久、小林仁、山口高弘(東北大)

岡田俊也 13:00-13:24

A-15 F344/Nラット歯牙の加齢変化。田中慎、山本貴子、曾根啓子、角保徳(国立長寿医療センター)

A-16 トリニトロベンゼンスルホン酸(TNBS)誘発腸炎モデルラットにおける新規細胞内菌体成分認識分子NOD2(Card15)の発現変化。藤澤正彦、堀口和秀、堀正敏、尾崎博(東大)

神谷新司 13:25-13:48

A-17 食性の異なるコウモリの胃におけるキチナーゼの免疫組織化学的研究。赤羽ちひろ、佐々木基樹、北村延夫、山田純三(帯畜大)

A-18 マウスの消化器上皮に発現するガレクチン。仁尾純子、今野明弘、橋本善春、昆泰寛、岩永敏彦(北大)

塚原伸治 13:49-14:24

A-19 牛と羊の空腸筋層間神経叢におけるNOニューロンの免疫組織化学的研究。北村延夫、佐々木基樹、山田明夫、山田純三(帯畜大)

A-20 ニワトリ回腸のニューロテンシン含有細胞に及ぼす飼料中タンパク質含量の影響。平松浩二、潮路智美、喜多一美、大島浩二(信州大)

A-21 汎毛胎盤を有する反芻獣マメジカの胎盤構造について。木村順平、Teguh Budipitjo、佐々木基樹、北村延夫、山田純三、鈴木正嗣、遠藤秀紀、Peter Wooding、福田勝洋(日大)

平松浩二 14:25-14:48

A-22 牛の空腸および回腸パイエル板の形態と機能IV 単離パイエル板リンパ濾胞内サイトカインmRNA発現の差異。保田昌宏、那須哲夫、村上隆之(宮崎大)

A-23 プタM細胞の分化機構に関する組織化学的解析。宮澤光太郎、金谷高史、鈴木里奈、林清吾、永井康裕、木戸丈友、渡邊康一、大和田修一、麻生久、山口高弘（東北大）
保田昌宏 14:49-15:12

A-24 ラット小腸パイエル板の濾胞被蓋上皮におけるM細胞の分化に関する超微形態学的研究。大西佐知子、陳慶義、湯地みどり、横山俊史、塚原伸治、星信彦、北川浩（神戸大）

A-25 ラット小腸の粘膜上皮における糖の発現と常在細菌の定着との関係。陳慶義、湯地みどり、大西佐知子、横山俊史、塚原伸治、星信彦、北川浩（神戸大）
大森保成 15:13-15:48

A-26 ニホンイモリ *Cynops pyrrhogaster* の嗅覚系におけるGタンパクの発現に関する研究。添田聡、伊豆弥生、神谷新司、斉藤徹、山野秀二、谷口和之（日獣大）

A-27 糖鎖発現特性に基づいたミシシッピーアカミミガメ嗅覚系の投射様式の検索。伊藤博康、山本欣郎、及川寿浩、谷口和之（岩手大）

A-28 ハシプトガラスにおける鳴管筋の形態計測および神経投射様式。塚原直樹、長澤美幸、青山真人、杉田昭栄（宇都宮大）
添田聡 15:49-16:24

A-29 ニワトリにおける嗅粘膜の組織学的研究。名生賢介、大森保成、宗宮弘明、福田勝洋（名古屋大）

A-30 マウス副嗅球の糸球体周辺細胞に関する形態的・生理的特性の解析。横須賀誠、佐原資謹、市川真澄（聖マリアンナ医科大）

A-31 ラットの気管におけるvanilloid receptor subtype 1の分布。佐藤良和、山本欣郎、谷口和之（岩手大）
九郎丸正道 16:25-17:00

A-32 F344N雌ラットの腎臓の組織構造における加齢変化。矢吹映、田中慎、松本光春、上村亮三、鈴木秀作（鹿児島大）

A-33 マウス腎臓の雌雄差-生後発達に関する形態計測学的研究-。岡田亜矢子、矢吹映、松本光春、鈴木秀作（鹿児島大）

A-34 マウス糖尿病性腎症(DN)における腎臓内レニン-アンジオテンシ系(RAS)の動態。田村純、今野明弘、橋本善春、昆泰寛（北大）
矢吹映 17:01-17:36

A-35 遺伝性腎疾患(ICGN)マウス腎線維症におけるTGF- β スーパーファミリーの関与:BMP-7によるTGF- β 1シグナルの負の制御。阿南小有里、後藤康文、山口-山田美鈴、坂田千夏、内尾こずえ、山本美江、小倉淳郎、真鍋昇（京都大）

A-36 Smad4遺伝子過剰発現は尿管間質線維芽細胞に脱分化を誘導する。後藤康文、阿南小有里、山口-山田美鈴、坂田千夏、内尾こずえ、山本美江、小倉淳郎、真鍋昇（京都大）

A-37 遺伝性腎疾患(ICGN)マウスにおける腎臓特異的発現遺伝子のマイクロアレイ解析。山口-山田美鈴、後藤康文、坂田千夏、阿南小有里、小倉淳郎、山本美江、真鍋昇（京都大）

9月11日(土)第2会場(9:00-16:00)
山本欣郎 9:00-9:36

A-38 ラット脳の上皮細胞に関するレクチン組織化学的研究。神谷新司、大坪千尋、伊豆弥生、添田聡、山野秀二（日獣大）

A-39 顔面神経核における組織形態学的比較検討。古谷累、北一郎（東京都立大）

A-40 ゼブラフィッシュ縫線核セロトニン作動性神経の発達におけるヘッジホッグと線維芽細胞成長因子の関与。寺岡宏樹、横山竜太、Claire Russel、Jennifer Regan、Anand Chandrasekha、Miguel Concha、董武、武内昌哉、Stefen Wilson、平賀武夫（酪農大）
北村延夫 9:37-10:00

A-41 ラット三叉神経節におけるTREK-1、TREK-2の局在。畠山拓、山本欣郎、谷口和之（岩手大）

A-42 雌ラットのサージ状GnRH分泌発生制御機構における神経活動の経時変化。塚原伸治、星信彦、北川浩（神戸大）

今川智敬 10:01-10:36

A-43 スナネズミの脳虚血時における学習記憶能力に関する研究:月齢による影響。片岡雄介、森岡宏至、岡田利也（大阪府大）

A-44 大脳皮質虚血耐性現象とAkt活性との関係について。中島崇行、岩淵貞弘、宮崎浩之、大熊康修、稲波修、桑原幹憲、野村靖幸、河原剛一（北大）

A-45 Neural degeneration with tau inclusion in FAD mutant PS-1 knock-in mice. 種村健太郎、宮坂知宏、近藤隆、高島明彦（理研）
中島崇行 10:37-11:00

A-46 神経細胞との共培養下におけるGlycogen Body細胞の形態学的観察。今川智敬、正垣恭子、上原正人（鳥取大）

A-47 低濃度メチル水銀処理によるラット小脳初代培養細胞apoptosis誘導におけるCa⁺⁺依存性プロテアーゼ(calpain)活性化の関与。坂上元栄、岡崎舞子、原俊太郎（北里大）
佐々木文彦 11:01-11:24

A-48 シバヤギの視床下部-下垂体-副腎におけるアンドロゲン受容体の分布。前島裕子、青山真人、平尾温司、杉田昭栄（宇都宮大）

A-49 ニワトリの副腎を支配する神経細胞の局在。渥美博之、大森保成、福田勝洋（名古屋大）
山本雅子 11:25-11:48

A-50 分化発達にともなうウシ精巢の細胞増殖能とステロイド合成酵素の局在。佐々木基樹、松崎重範、高橋健一、坪田敏男、北村延夫、山田純三（帯畜大）

A-51 エゾシカ (*Cervus nippon yesoensis*) 精巣におけるステロイド合成酵素の局在に関する免疫組織化学的研究。早川大輔、佐々木基樹、鈴木正嗣、坪田敏男、北村延夫、山田純三（帯畜大）
佐々木基樹 13:00-13:24

A-52 胎生期のDES曝露が生後のステロイドホルモン・レセプターの発現に及ぼす影響。小林徹央、山本雅子、有嶋和義（麻布大）

A-53 出生前のPCBs投与が雄ラット精子形成に及ぼす影響。山本雅子、成田彰子、白井明志、赤堀文昭、有嶋和義（麻布大）
寺岡宏樹 13:25-13:48

A-54 Mono (2-ethylhexyl) phthalate causes cell death in testes of prepubertal mice. Tay TatWei, Andriana Bibin Bintan、石井万幾、金井克晃、九郎丸正道、林良博（東大）

A-55 低濃度複合汚染による内分泌攪乱化学物質のマウス雄脳内ステロイドホルモンレセプター遺伝子の発現変化ならびに生殖腺への影響。星信彦、町田佳名子、松山道子、割田克彦、千田廉、塚原伸治、北川浩、長谷川喜久（神戸大）
吉岡一機 13:49-14:24

A-56 MRL/MpJマウスに好発する卵巣嚢腫。昆泰寛、並木由佳、佐々木宣哉、今野明弘、橋本善春、遠藤大二（北大）

A-57 プタ卵胞発育過程におけるヒアルロン酸とヒアルロン酸合成酵素遺伝子発現の動態。松本浩道、三宅裕子、今野祥頭、横尾正樹、佐々田比呂志、佐藤英明（東北大）

A-58 プタ卵胞閉鎖におけるBid発現制御解析。井上直子、吉岡亮介、松田-峯畑二子、酒巻和弘、福田勝洋、真鍋昇（名古屋大）
木村順平 14:25-14:48

A-59 プタ卵胞の顆粒層細胞はII型アポトーシス細胞である。真鍋昇、松井俊勝、後藤康文、井上直子、松田-峯畑二子、前田章央、阿南小有里、杉本実紀（東大）

A-60 ラット子宮におけるスピントラップ-EPR法を用いたNO産生の解析。森智絵美、池田義則、佐藤歩、吉川宏、森田英利、田中和明、滝沢達也（麻布大）
真鍋昇 14:49-15:12

A-61 受精後30日齢ウシ初期胎子の消化管上皮細胞分化と炭酸脱水酵素アイソザイムの発現性。尼崎肇、金原零、佐藤春奈、市原伸恒、浅利昌男、西田利穂、松永直行、木村信照（日獣大）

A-62 アライグマ指球表皮の微細構造とヒアルロン酸の局在。安井禎、月瀬東、Meyer Wilfried（日大）
松元光春 15:13-15:36

